広報 かなぎ

編集と発行
金木町企画室
青森県北津軽郡金木町
大字金木字朝日山323
電話(53)2111 内線240

****

祝 金木町に金木さん

斜陽館 5万人突破

四月十七日に太宰治記念館としてオープンした「斜陽館」の有料入館者が八月八日、五万人を突破し、館内で記念セレモニーが行われました。

記念すべき五万人目の入館者となったのは山形県天童市の金木笑子(かなぎえみこ)さん。夫の稔さんと前日から青森入りし、津軽地方の旅をしていて最終目的地が「斜陽館」ということでした。

鳴海町長と成田教育長から記念品を贈呈された金木さんは「私たちと同じ名前の金木町に親しみを感じ、ぜひ訪れたいと思っていた町。実はここに来る途中、道に迷ってしまって・・・それがよかったのか。あらためて金木町に縁を感じます。思い出に残る旅になりました」と感激していました。

1998
8
No.388

嘉瀬奴踊り

嘉瀬と金木の間の川コ
石コ流れて木の葉コ沈む

津軽藩が、二百年以上の歳月をかけて行った津軽地方一円の新田開発。その中で生まれたとされる「嘉瀬奴踊り」の一節

“嘉瀬と金木の間の川コ
石コ流れて木の葉コ沈む”

とは「世の中さかさまだ」と、時の世相を痛烈に風刺した詩と言われています。

「嘉瀬奴踊り」は、どのような背景から誕生し、伝統芸能として今日まで継承されてきたのかを探ってみます。

金木郷土史（昭和五十一年十二月発行）による“嘉瀬奴踊り”の由来は、「今を去ること二百八十五年前、津軽四代藩主信政公は領内の開墾に力を注ぎ、藩士を投入して新田を開発し、米の増収を図ることにした。藩士たちは藩主の仰せとはいえ、武士としてはずかしめにあったように思い、新田開発の希望者は少なかった。しかし、鳴海伝右衛門は妻子と奴徳助をつれて嘉瀬に住み、近隣の百姓たちと共に藩主の命令に従い、開墾に熱意をもち、昼夜の別なく総力をあげ、数年後には三百町歩の良田を造成することに成功した。しかし、ある年期限に遅れて金木御蔵に年貢米を納めにいった際、かつて同僚であった者が金木御蔵の役人として出世しており、伝右衛門を見る目が以外にも冷たく、腰抜け武士の典型よと冷笑した。

伝右衛門は次第に懐疑的になり、日がたつにつれて沈みがちになった。主人思いの奴徳助はこのさまをみて、恵まれない主人をなぐさめようと

して思いついたのが、次の歌詩であった。

嘉瀬と金木の間の川コ
石コ流れて　木の葉コ沈む

そして自分でふしをつけ、振りつけもし、秋の取り入れの振舞酒や、月見の夜など自ら踊り、主人の不遇をなぐさめたのが、嘉瀬の奴踊りとなって残されてきたのだという。

『石コ流れて木の葉コ沈む』とは、誠実な者は恵まれず、上役に要領よくとり入る軽薄な者が『ノサバル』ことを暗に言ったものだろうと言われ、いわゆる『この世はさかさまだ』ということを風刺した、農民のレジスタンスを秘めた唄とみてよいだろう。このことが藩主の耳にはいり、領内を巡視した際、この踊りを見て賞し奴踊りと命名したといわれている。

この奴徳助の心遣いに、伝右衛門は心から喜んで、自分でもこれを唄って踊ったという。前記したように、この唄と踊りが藩主の知るところとなり、やがて二人を弘前のお城に呼び、御前で唄い踊らせたところ、ことのほかよろこばれて称賛されたと伝えられている。それからは、村人も踊りを習い、お祭りやお盆には村をあげて踊り、今日に及んでいる」とあります。

藩主への直訴

ここで、この“奴踊り”誕生の中で悲劇の人物となったであろう鳴海伝右衛門の子孫にあたる鳴海輝男さん（下古町）に、奴踊りについて伺ってみました。鳴海家に代々伝わる由来によると次のとおりとなっています。

「およそ三百年位前、津軽四代藩主信政が鳴海伝右衛門と工藤五郎兵衛の二人を、この地の新田開拓の工事奉行として着任させた。

上手には工藤五郎兵衛。土地もよく、腹いっぱい餅を食わせるなどと言って、昼夜休ませず働かせたので仕事もはかどった。

下手の伝右衛門の土地はとっても悪く開拓がはかどらない。実直な性格だった彼は、開拓には全力を尽くしたが使役する農夫たちの苦労を思って決して無理をさせなかった。このため、工事が長引き五郎兵衛の開拓が終わったころ、伝右衛門はまだ三分の二ほどだった。

五郎兵衛は、農夫を酷使して急がせ、約束の餅を一つも食べさせず城へ返っていった。開拓の月日が遅れ、また上役の不興を買い伝右衛門には、城へ返って来いの命令はこなかった。主人思いだった鳴海家の徳助は、このさまを見て大いに無念がり今の世の中逆さまだ、良い人が沈んで悪い人が上役で威張り散らしている。これを見兼ねた徳助は嘆き悲しみ、伝右衛門をなぐさめるために唄い踊ったという」

嘉瀬と金木の間の川コ
石コ流れて　木の葉コ沈む

（悪い人が出世で上役に良い人が下役で芽がでない）

鳴海さんは「『上手』とは、つまりほどよい土地を開拓するのと、『下手』―ただの荒地を開拓するのでは差がでるのは当たり前。藩としては、開拓が早く終われば年貢米が

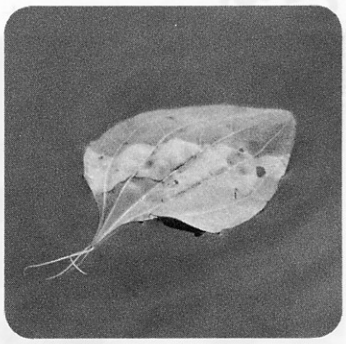
上がる。一方で、開拓が遅れることをよく思うはずがない。ある時、藩主が視察に来るという情報を得た徳助ら百姓たちが、直訴御法度の世相、藩主の前で実情を訴えるために、嘉瀬八幡宮で唄い踊ったもの」と、言い伝えを語ってくれました。

農民の血と汗と涙の結晶

しかし、「嘉瀬ふるさとを探る会」会長である木村治利さん（新堤町）は、ちょっと違った見方をしています。

「当時、新田開発に従事した百姓が、多数犠牲になったことを忘れてはいけない。藩は見回りの武士に『仕事を怠ける者があったら、一日三人まで切り捨て御免の許可を与える』などとし、津軽平野の開拓は、凶作と重労働に苦しむ百姓たちの血と汗と涙の結晶である。貧困のどん底にあった百姓たちは牛馬のごとく働かされ、生産した米は年貢として収納させられた。

このような藩政を恨み『我々百姓も人間なんだ、人間らしい生活を！』という農民の怒りの心が、『石コ流れて木の葉コ沈む』の歌詞を生んだのではないか。嘉瀬の奴踊りは、忠僕徳助が主人鳴海伝右衛門をなぐさめるために踊ったという美談によって生まれた芸能だといわれる。しかし、当時の百姓の悲惨な生活を考えると、この踊りはひとり嘉瀬の農民だけに生まれた芸能なのではなく、津軽農民全体の嘆きの祈りが込められているのではないだろうか」と推測しています。



〝嘉瀬の桃〟「民謡の神様」黒川桃太郎

このように、嘉瀬奴踊り誕生にまつわる話はいくつかありますが“これだ”という史実はありません。ただ、津軽地方の小さな村で生まれたこの踊り（唄）が、全国的に有名になったのは何故なのでしょうか。

「忘れてはいけない人物がいる。それは不世出とたたえられた民謡の神様〝嘉瀬の桃〟こと『黒川桃太郎』だ。彼が全国を行脚しながら、三味線を弾き、唄い、踊り、世に知らしめたからだ」（木村さん）

昭和二十六年ころ、伝統を守ろうと同地区では「奴踊り保存会」を設立し、同三十七年には全国民謡芸能大会で優勝をするなどしています。また、同四十四年には関係者の尽力により、青森県無形文化財の指定を受けています。

▲嘉瀬八幡宮

奴踊り発祥地の碑

嘉瀬と金木の間の川コ
石コ流れて　木の葉コ沈む

川を、石が流れて木の葉が沈むことなど非現実的。しかし、時の世相を痛切に感じさせるこの歌詩は、現代にも一石を投じているのではないでしょうか。

嘉瀬小学校では伝統芸能の継承のために、と毎年「奴踊りチャンピオン大会」を催したり、運動会や夏祭り、節目節目には見事な踊りが披露されています。

歌声も高らかに・・・。

代々受け継がれた「奴踊り」は、いまなお健在しています。

文化使節団来町

太宰のふるさと友好都市、山梨県河口湖町から、第一回交流事業として八月三、四日の二日間、渡邊澄雄河口湖町教育長を団長とする文化使節団が当町を訪れました。

河口湖町では七月に、太宰作品に関する感想文などを募集し、優秀作品者を金木町へ派遣する企画を行いました。その結果、渡邊教育長はじめ、河口湖南中の渡辺明日香さん（三年）、同じく梶原梢さん（三年）、河口小の外川淳二君（六年）と父・久さん、船津小の河田望さん（五年）と父・茂さん、教育委員会の中村孝一さんの八名が青森県を訪れました。

▲ちょっと緊張ぎみの子供たち。役場を訪問

八月二日、空路青森入りし、当日は弘前ねぷたなどを見学してそのまま宿泊。翌日、電車を乗り継ぎ、津軽鉄道で当町に到着しました。一行は、成田教育長の歓迎を受け、役場を表敬訪問。渡辺明日香さんが「太宰のふるさとを訪れ、文化や文学をたくさん私たちの心に刻みたいです」と団員を代表してメッセージを読み上げました。

その後、小説「津軽」のクライマックスの舞台、小泊村を訪れ記念館を見学。金木町に戻り、津軽凧作りに挑戦しました。成田教育長らの指導を受け、初体験の凧作りに興味を示し、四苦八苦しながらも世界に一つしかない自分でデザインした凧を完成させました。

最終日の四日、日本一のヒバの巨木「十二本ヤス」を見学した後、芦野公園をはじめとする「太宰ゆかりの地」を散策。桜桃忌の行われる太宰文学碑や、公園内の吊り橋、浮き橋を散歩しました。その後、太宰の母校にある碑、百八十七作品名が刻まれている思い出広場、太宰がよく行って見た雲祥寺の地獄絵図などを見学。そして、生家「斜陽館」へ足を運びました。

成田教育長に案内され、館内をゆっくり、じっくり、何かを学びとろうと説明を聞きながら見学していました。

太宰は、津島家から勘当されている身であった昭和十三年、師である井伏鱒二の呼び掛けで河口湖町にある御坂峠の「天下茶屋」に滞在し、作家活動を再開。この後に甲府の石原美知子と知り合い結婚。天下茶屋での生活が、精神的にも肉体的にも再スタートを切る場所となり、太宰にとって河口湖町は忘れられない“思い出の地”となったことと思います。

勇壮にそびえたつ富士山と片隅にポツンと咲く一輪の花、月見草。〝富士には月見草がよく似合ふ(う)〟、河口湖町の人は太宰を知らなくても、この言葉はだれもが知っているようです。

太宰から、〝贈り物〟をもらった両町の友好関係のきずな

太宰のふるさと友好都市

河口湖町から

が今、動きだしました。
金木町を訪れたみなさんは、きっと大きな“心の土産”を河口湖町に持ち帰ったことと思います。

▲女の子らしく口元はよりていねいに

▲慣れた？手つきで筆を走らせる

▲親子で仲良く河田さん

▲あれ！手についちゃった

「そうそう」と成田教育長。外川さん親子▲

▲「こうやって」と福長さん

▲渡邊教育長も真剣

◀太宰とタケの再会場所・小泊村にて

▶太宰作品の多さにちょっとびっくり・思い出広場

◀完成した凧を手にして

▶神木「十二本ヤス」その容姿にビックリ

「青森県へ行って」

船津小５年
河田　望

私は、河口湖町の文化使節派遣団の一員として選ばれ、とてもこうえいです。それは、初めて訪れた青森県へ行って、太宰治の古里のことや、ねぶた祭りのことなどを学んで、ほんとうに勉強になりました。日本のきんだい文学史にのこる太宰治の生まれ育った家、現在の斜陽館での小さいころからの生活を、教育長の成田さんが家の中をまわって、わかりやすく説明していただきたくさんの太宰のことを知りました。とくに、小説「津軽」の像記念館でのビデオシアターを見て、太宰治が三十九才でなくなってしまったことを知りました。私は、(太宰治はこんなにはやく死んでしまったんだ) と思いました。でも、なくなるまでの三十九才までの間に、数おおくの心にのこる作品を書いているのです。金木小学校の近くの休む所に、太宰治の作品の数々のだいめいがはられてありました。私は、太宰の作品の中で友情をえがいた「走れメロス」がはってある所で写真をとりました。太宰治ってすごい小説をたくさん書いたことを知りました。

また、教育長さんや凧作りの会長さん副会長さんに教えてもらった凧作り、とてもたのしい時間でした。みなさんには、とてもしん切にしていただき、この三日間きちょうな体験をさせていただき、たいへんうれしく思いました。ほんとうにありがとうございました。また、こういうきかいがありましたら、参加したいと思います。

「私がこの旅行で思ったこと」

河口湖南中３年
梶原　梢

とても楽しかったし、とても勉強になりました。本当にありがとうございました。何がよかったかというと全部なのですが、初日に函館に行ってしまったのでドラえもんの電車に乗って青函トンネルを通ったのはとても楽しかったしドキドキしました。

弘前のねぶた祭りは最高で、とても感動しました。すごく大きいし、あの絵がなんといってもいいです。太鼓は力強くてとてもかっこよかったです。(私は青森の人がうらやましかったです。私も太鼓を叩きたいって思いました)

そして、太宰治についてもたくさん学ぶことができました。でも、太宰の家には本当に驚かされました。超高級の大金持ちでした。それにしても太宰が自殺したってことが許せないです。麻薬は使うは、妻と子を残して他の女と自殺するは、この辺は嫌いです。やっぱり死ぬことこそ自分が

◀成田教育長に説明を受けながら少年時代の太宰について学ぶ

▶斜陽館前にて

▶「ありがとうございました」と成田教育長に最後のあいさつ

弱い証拠だし、私はこのときの太宰の気持ちはまったくわからないけれど太宰は弱虫です。現実と戦わずに逃げたあげくに、一人で死ぬのではなく心中したわけだし、どんなに辛くても死によってその苦しみから抜け出そうとするような考えはいやです。私は彼が人間的には（少し）嫌いだけど、彼の作品はとても好きなのでもっとたくさん読みたいと思います。特に「津軽」―**私は太宰に一言いいたい**―「今度生まれ変わったら自殺なんかしちゃダメだよ。あなたが死んで悲しむ人もたくさんいるし、逃げずに生きろ！」ってね。

私は、この旅行を通して生き方も教わった気がします。本当に本当に楽しかったです。これが私の思ったことのすべてです。

「青森県訪問について」

河口小６年
外川　淳二

ぼくは、初めて行った青森がとても気に入りました。特に、ねぷた祭りはいままで見たお祭りのなかでいちばん迫力があってかっこいいなぁと思いました。

あと、印象に残っているのは凧作りです。凧を作ったのも初めてで、ぼくがとまどっていると教育長さんや凧作りの会長のおじさんたちがやさしく教えてくれました。

金木町は、ぼくの住んでいる所よりもっと田舎だけど、町の人がみんなやさしくて自然がたくさん残っている所で住みたいなぁと思いました。

そして今回、旅行に一緒に行った人たちとも仲良くなれてとても楽しかったです。どうもありがとうございました。

「文化使節派遣団の一員になって感じたこと」

河口湖南中３年
渡辺明日香

私は今回、派遣団に選ばれたことを大変嬉しく思いました。なぜなら、金木町を訪れて文化や文学を学び、それらに対して、よりいっそう興味を持って帰ってこられたからです。

特に、「津軽の像記念館」や「斜陽館」で太宰治について、とても勉強になりました。私は太宰については、教科書で習うようなごく一般的な事しか知らなかったので、彼の遺品や写真、年譜、パネル、また彼の作品に関する資料を見ることによって、彼についての理解が深まりました。さらに、彼に対して親近感も持てました。私は、地元にある碑や天下茶屋には行ったことがないので、いつかそちらにも行こうと思います。

また、津軽凧作りも大変楽しかったです。